

アメリカの有名な作家であったアート・バックウォルドに「だれがコロンブスを発見したか」という短文がある。アメリカ大陸は一四九二年にコロンブスが発見したというのが通説であるが、その上陸した小島にはコロンブス一行を出迎えた先住民族が存在していたという趣旨である。この短文が象徴するように、社会では特定の立場から記述された歴史が流布してきた経緯がある。

アメリカ大陸の発見については数万年前にアジアからベーリング海峡を渡来してきたとされる人々を別格にしても、一七〇年代のイスラム教徒の到達、一四二〇年代の中国明朝の艦隊の到達など、明確な証拠が存在しない諸説もある。さらに一〇〇〇年頃にスカンジナビア半島のヴァイキングの集団が現在のカナダの東部に到達して定住していたことについては遺跡が発見されている。このような歴史の課題は数多く存在する。

昨年八月、北米大陸に標高六一九四呎のデナリという高峰が誕生した。地殻変動や火山爆発によるものではなく、アラスカにあるマッキンリーをアメリカ政府が改名したのである。元来、地域の先住民族は偉大なる存在という意味のデナリと名付けていたが、アラスカにゴールドラッシュで殺到してきた人々が、大統領候補者W・マッキンリー応援の意味で一八九六年に勝手に改名していた。それが今回、復元されたのである。

オーストラリア大陸中央にある世界第二の巨岩は先住民族アボリジニがウルルと名付けて神聖な存在としていたが、一八七〇年代に大陸横断をした探検隊長が世話になったオーストラリア総督H・エアーズに御礼の気持でエアーズ・ロックと命名した。しかし、返還請求により、一九八六年に先住民族に返還され、名称もウルルに復元された。経緯に無知な人々が登山しているが、先住民族には侮辱以外の何物でもない。

アメリカでは侵入してきた人々と先住民族との対立が現在でも顕著になる事例がある。一月第四木曜日は感謝祭というアメリカの祝日になっている。これはイギリスからアメリカに移民してきた人々が食料や種子を提供してくれた先住民族に感謝の祝宴を開催したことが起源とされる。しかし、一九七〇年以来、先住民族は当日を全米哀悼記念日としている。祖先が略奪され虐殺された歴史を想起する目的である。

これらが証明するように、一九世紀以後、帝国主義が世界に跋扈して、世界各地で先住民族の領地が略奪され、文化が破壊されていったが、最近、復元の兆候が顕著になりつつある。その一例はニュージールランドの国旗を、イギリス植民地を象徴するユニオンジャックと南十字星の模様から、シダと南十字星の模様に変更する提案である。国民投票で否決されたが、シダは先住民族マオリが崇拜する神聖な植物である。

科学万能の風潮も騒動となることがある。ハワイの標高四二〇五呎の高峰マウナ・ケアの山頂には二二の天体観測施設が設置され、さらに現在、口径三〇呎の超大型望遠鏡が建設されている。昨年、この建設に反対する人々が頂上への道路を封鎖するという実力行使が発生した。天文学者にとっては宇宙の仕組の解明に役立つと期待する施設であるが、先住民族の立場からは神聖な山頂を侮辱する我慢できない行為である。

コンピュータ分野の偉才アラン・ケイに「視点はIQ八〇に相当する」という名言がある。物事を観察する視点が結論の八割を決定するという意味である。今回紹介したのは歴史の事例であるが、昨今の企業経営も、ウルグアイのムヒカ元大統領の指摘のように、強欲資本主義の視点に片寄りすぎている。複数の視点から事態を観察して判断することが、ますます重要になる時代である。